

## AOM-5 パーキンソン病との比較によるレビー小体型認知症の認知機能の特徴についての検討

<sup>1</sup>国立長寿医療研究センター先端医療開発推進センター,

<sup>2</sup>国立長寿医療研究センター脳神経内科部,

<sup>3</sup>名古屋大学大学院医学系研究科神経内科学

田中 誠也<sup>1</sup>, 辻本 昌史<sup>1</sup>, 新畑 豊<sup>1,2</sup>, 平賀 経太<sup>3</sup>, 佐竹 勇紀<sup>3</sup>, 服部 誠<sup>3</sup>, 勝野 雅央<sup>3</sup>, 鈴木 啓介<sup>1</sup>

【目的】認知症を含む神経変性疾患における評価・治療法の開発において自然歴の把握は重要である。しかし、レビー小体型認知症 (DLB) では、認知機能の経時的変化についての報告は乏しい。そこで今回我々はDLBと同じレビー小体病であるパーキンソン病 (PD) と比較しつつ、DLBの罹病期間と認知機能との関係について検討した。【方法】対象はDLB患者14名とPD患者33名。DLB患者とage matchさせるために70歳以上のPD患者に限定した。平均年齢はDLB 79.5±4.8歳、PD 76.8±4.6歳。認知機能評価である日本語版 Montreal Cognitive Assessment test (MoCA-J), Trail Making Test (TMT), Stroop Test, Line Orientation test と罹病期間との関連を横断的に解析した。【結果】DLBでは、MOCA-J, Stroop Test, Line Orientation test は罹病期間と相関を示した (それぞれ $\gamma = -0.708, 0.583, -0.404$ )。なお、TMTの実施可能であった対象者は1例のみで、相関係数の算出は困難であった。一方、PDにおいてはTMTのみ罹病期間と高い相関を示した ( $\gamma = 0.544$ )。【結論】DLBとPDで罹病期間と認知機能との関係性に違いが認められたことから、同じレビー小体病であってもDLBはPDと異なる認知機能の自然歴を示す可能性が示唆された。

## AOM-6 ALS/MNDセンター外来における筋萎縮性側索硬化症患者への多職種チームアプローチ

<sup>1</sup>東京都医学総合研究所, <sup>2</sup>東京都立神経病院ALS/MNDセンター

原口 道子<sup>1</sup>, 木田 耕太<sup>2</sup>, 林 健太郎<sup>2</sup>, 木村 英紀<sup>2</sup>, 清水 俊夫<sup>2</sup>, 早乙女貴子<sup>2</sup>, 本間 武蔵<sup>2</sup>, 大場 優子<sup>2</sup>, 村上 未来<sup>2</sup>, 大塚 真弓<sup>2</sup>, 三村 恵美<sup>2</sup>, 新井 玉南<sup>2</sup>, 矢吹みゆき<sup>2</sup>, 増田 理恵<sup>2</sup>, 吉泉美瑛子<sup>2</sup>, 塙 良江<sup>2</sup>, 奥山 典子<sup>2</sup>, 中山 優季<sup>1</sup>, 松田 千春<sup>1</sup>, 高橋 一司<sup>2</sup>

【目的】ALS患者の多様な健康課題および療養生活課題に対応する多職種チームアプローチによる個別性に応じた多角的かつ包括的な支援の成果について評価する。【方法】医師・看護師・リハビリテーション療法士等で構成するチームが、身体情報 (簡易機能検査等)・療養生活情報を把握し、専門的知見に基づき支援を展開する。前向き研究として1年間で蓄積した観察・測定項目、支援項目の関連を分析した。【結果】対象36名 (延105回) の初回時点の平均罹病期間は1.6年 (SD=1.8), 平均受診回数は2.9回/人 (SD=1.8) であった。観察・測定項目は、最大呼気流量、努力性肺活量 (FVC)、舌圧、体格指数は相互で相関を認め、ALS機能評価スケール低下率 (進行速度) の2群比較では、呼吸・嚥下機能と有意な関連を認めた。特に%FVC50%以下で進行が速い患者に対しては、適切なタイミングで人工呼吸器装着や胃瘻造設が進められていた。支援項目では、「治療方針や医療処置の確認」「家族支援」「体位・姿勢」などの介入率が高かった。【考察】病状変化をタイムリーにとらえた診療および生活上の課題解決や安全確保を幅広く計画的に展開していた。